幼學義經物語 二編 四

205
9

東京帝国大学

掬松誘母墓師父話
求馬援妻殺賊婦話

言時小百合尼母子そ庵の裡ふ入得て。一盞茶時敬ひてありける處ふ。齢五十ばかりとおぼしき媼の出来ふ云ふ様。奴家ハ此家の主ふくゆひねさうぬぐき契りけりてう。佛體を做るくる仕方を宿しすいふせ。甚喜びーうゆ。かゝれ邊鄙のことふーあれバ方の事ふてかゝ様ばさそいづせき事ふおぼとふめど。當國ふ國守の政正しく。偷児の患ひなく静謐ふくゆ。公とゆふ宿りふくるとふ甚ふ歎待ふれほどに。小百合尼喜びよりてわどふ慇懃ふ[illegible]の丁髪食膳ふ[illegible]出るおそ。主媼これを勧ふ。尚四方山の説から

特 へ 13 207 9

とそれ折ふし云つるまれに此邑ハ名高き好酒のゆゑ尼媼ハ一くさ
めさんや否。小百合尼いハ奴家素より酒ハ好むと云あハあふねどハ
驛路を行りのくに。時としくハ飲ことも多ねそれ何といふる酒ぞや
主媼のいハ是這川水をとりて醸るれば。とくに其名をとりて隅田川と
叫べり。華洛の佳酒ハもとより味のあれば近国こゝを争ひ索
むるよりこの地方ハ住ふる尚多く貯ることハ難し。老媼も酒ハ
嗜めば少〳〵貯へ持てるこ。ア髮を呼〳〵一陶を持らせ来る云。
此ゆゑに客人ハ多うしるのハ。僅ハ此一陶のこと残せり。いざや此酒ハ
さこしめし。旅の労を晴して寐ん。初更もすぎとおぼゆれば媼も睡りア
さんとかの一陶を其所ハ置ける。おのゞ臥所へ退けり。小百合尼ハ此陶をえて
想へらく。この鄙ハ出るまれ酒のなどゝ佳味のあるべき。もしあれ人の志を

空ちうせんも主趣意の用ゝ法られ酒の空陶あるなれば。此酒を彼陶ハ
入るゝ。途ハ法られ酒なりと云送らんあハ主の志ハ空しうせざるあり
ぶてと暴ハ移り替て髮と呼〳〵いハ主の賜ひられ酒を傾けるハ實
ハ佳味ハ。此程ハなれを醉を尽し喜ばるゝ。是又今日途ハて能き酒
なりどいへれ法へべしが今宵の酒の報ひハ些〳〵りあを
あれと這酒をまいらさなりと傳へてよ〳〵。彼酒陶を遍ちの折ハ了
髮乙と得て其陶を携へ出去りぬ。斯〳〵母子い枕引よせ休ひまれの
旅の労れをよるれば寐るゝなり〳〵睡まり。原来此家墨水の岸ハ添ハ
ゞありほとべ流の音高ハ聞えく。幾回ハ夢ハ破られ一度ハ小百合
そうちも寝られぐ。過越方のことなど想ひ出ぐ〳〵れ涙ぞまとく
眼〳〵閑さに四方寂寥まれ折ふし更の天とおぼしたハ八ハく

小百合尼
弥生が
娘と解
助く

遠寺の鐘鍾としく旅寐の夢と驚し。天度雁の声を故郷と思し
め。頭ゐ腸と断の想ひと做時こそあれ。千草ゐ啞〻虫の声々あ〻ねゐ鳴
ゐ泣声のしけ比べ甚怪しと耳ゐ清して替とゆゐ正しう女の声音ゐ
みぞこゑ何等縁故ありてか〻深更ゐ及び〻嘆れゐ心ど得ねこと
かると拵松ゐ寐さし置。そこら房間と立出〻。声と知ゐたり行しゐ
正屋と離れとこれ処ゐ一軒の小舎あり。這裡ゐこと泣声のしけ比べ蜜ゐ
裡をさし覗〻ゐ。窓とり漏〻月影ゐそし着比べ〻艶ゐ
女の綿ちられて泣い〻ゐぞこゑけしかねことよと。戸と開ひ〻裡ゐ入り
女ゐ對ひ〻いゐ。大姐そ何等人ゐ在まして斯綿やられ〻嘆き〻ゐぞ
女驚き頭ゐ上げ小百合尼ぞとし着くいゐ尼媼も旅客とこゑゐ世
う。悪き家ゐ宿〻ゐ比べ遂ゐ憂めゐ遭ゐ奴家も素旅ゐ者

なれゐ此家ゐ宿〻斯のごゐ比辱しゐを喜るのこゐ。いろゐ成ゐ
計てがとし。涙さしぐるぞ。小百合尼いゐ尼媼い京洛とのゐれゐ
東國の方の霊佛ゐ詣でんとはゐれのなり。大姐も何とゆゐん都の人と
見うけ系〻せられべ同郷のこゐ。繋比べゐ縁故を従実招誤
ゐ。女のゐら命のごゐ奴家い京洛東山ゐ伊藤董市と叫做的の女
児ゐ弥生とゆゐのなり。去る頃父母ゐ辞世ぐるゐ。然るゐ京洛そ
父ゐ兵乱ゐ。人の心も猛〻しして。郡盗一揆多く發て。住ゐの憂
ゐ折ら。夫赤馬なれ人。東國ゐ幹夏ありて下らんとしれど。聒噪き
処ゐ女のゐ残し置んもし泣ゐ。さるとゐ東國い静謐なりと聞て被
所ゐ移て〻難ゐ避ぞと。奴家を將て此地方まで来り。此家ゐ宿し
ゐ誰ゐ主人ゐ是女子れ縁林はして。旅客と宿せ。麻木酒を飲せて

これを害し。其路費を奪ひ。又若し女子あれば。勾引て烟花に賣り
るゝとも。奴家夫婦ゐも。彼酒を飲まんとて。けだし。素より下戸
なれば其謀そなゝぐるりぬ。よりて我夫求馬を欺き。ひとり尋わび
き方へ出り。跡あゝ。こゝにわを賣んとせ。ゝ猪一なるべ。早く此地を逃る
べく。做ゝ。主媼ゐ者ゐあられて。斯郷の身となりぬと。涙を
俱ゐ說話ば。小百合尼これを聞て大いに驚き且憐み急ゐ郷を
解くいふ。大姐の宜るゐく思的ことのありと。前刻ゐ酒を送りし
るゐ詳ゐ說話我不図も危ふきゐ免れ。かゝれ所ゐ少刻も居
ぐるゐあゝぐ。いざ。せきまくと。弥生を誘ひ既ゐ逃れ生んとすれゐ忽
然として背後ゐ声ありて。旅人漫りゐ走りゐひぐいべきことのあるゐ
暫時とゞまりまくと呼とりければ。二人愕然と嗔的顧るゐ是ハ則這家

の主媼ゐるゐぞ。ちひゐ慌忙返答ゞこせと。戰栗逃れ去んとすを
主の媼ゐぐ中〳〵二条の縄をとり〳〵二人を縛ゐ弥生をば又故の如ゐ
繋ぐ置。小百合尼ゐ對ひて云尼媼何の讐ありて我浩寶を盜ん
とするぞ。今宵宿りれ恩をも不顧斯膽大なることを做こそ遺
恨なれ。尋常の人れ物ゐ盜むゐ斬殺さるゐ天下の通法なれ
ばひて恩人のものを盜まれぐ。殺すも尚飽ぐ〳〵小百合尼を柴の上ゐ
釣上置て髪を呼び酒を持〳〵せ来り三四椀を傾け。太やすらかに鞭
をうち笑て云。ある面白の光景や。斯狂ひ死さるゐ者とし。前刻
ゐ汝ゞ贈し酒を飲とて燥脾胃と甚悪さゞゐ云ゝ酒を飲ゝ
猛ち膝を撲地と拍くいふ。忘れてゝ我ゐ〳〵れ酒ハいゐゐ做ゝそ
飲ゐば今ゝや森木べくゐ。其さゐのゝくねば怪〳〵ゞ思ゐ我密計

を知らず飲ねとおぼえしかりさあらんあいよ〳〵命をとらでやハ置べきと又も頷りふ名ごで肉敗且鮮血滴り〳〵只涙〳〵泣叫ぶ其子面痛きあらしく目もあてられねぐるりなるこゝふ掃松と旅の労且ふよく聽てありけるが母の叫ぶ声の夢へられ忽ち驚て醒〳〵母と呼べども居〳〵れハ叫ぶ声を聞〳〵へ〳〵てまて尋ふ〳〵母の綁められあるを看て大ひふ驚て嘆きこハ何としたことぞ母うへをゞ饒しゝてあと其傍ら倍人とゝ事を主の媼ふ〳〵けあ〳〵もられを捉く彼所ふ撲地と投出し持てる鞭ふて連打ふ擊られば呼と一声夢へく其のらハ更ふ声なし小百合尼とれを看て泣哀しと助うんとあせれと綁られれハ奈何とも没理會只声を揚て奴家を殺〳〵其児をば助くよと叫ばれが何とうもうん綁の縄ふつと切られあど尼媼を喜び慌忙身ふ

我児を遠蓋われを主の媼いさまをして小百合尼をとゝく彼鞭を以て舌打されの憐しべしその的且る愚や悪うけん呼と一声叫びく仆且る七穀より鮮血滴〳〵と生〳〵終ふそうな〳〵失ふり斯て主の媼を鞭を傍ら置ふ〳〵ふ多く心苦〳〵と獨ごと〳〵前の酒を〳〵又三四椀を傾け一盞茶時休らひ〳〵ありるが此酒原己且ど蒙汁藥を入置を小百合尼ふとりかゝられれを知らぬ前ふも飲今又飲られハ猛ち酔ともふ毒氣発動し俄ふ四支戦栗出し口頷りふ涎を流し地上ふ倒且恰も死せる人のごゝ〳〵なり此時五更も過天既ふ明んとせ折ふ井の水馬ハ前日より義続公の居りふ届て京洛をもゝ〳〵の事ふ〳〵妻を倶して下且れこゝを告せ〳〵られふ義続公近日ふ上総の竹澤氏討んとゝふ折なれハいよ〳〵喜ばせ給ひ老早妻を倡ひ参且よゝの命ふ〳〵再び此度

求馬賊婦と
捉へ
書と
接ず

飯まりしが此光景を着て大ひに訝て驚き主の媼を助に起し問
眼のこゝろ付て一言も発せざれば怪しみ隈なく探索るに妻は
弥生は縛められくありけるゆゑ慌忙その郷と解く。縁故ゆゑ問ふ。弥生
泣く有枝有葉を説話ば求馬大きに怒りたまふ。そこにありあれ鞭
をとりて主の媼なるを撻て呼く呻きたまふが忽ち數升の血を吐ぬ此
時蒙汁藥の毒氣俱に出尽しまやゆ須臾麻木愈神氣もさまり生平
のごとくなりぬれを求馬再び鞭とりて擊んとすれば主の媼声を
揚く。旅人とやまひを我一言いのべきことあり。願くはこれを聞
求馬悪しゝとゝ奈何ゆゑとらんと鞭ばやくこれを止る主人
涙をとゝ流して云世に因果の報ひ恐おそるべしたのいはじ。是まで
做ける悪業一只今慙悔しゝ敵なるも夫婦は仁愛の心もて

とこゝに人くまひとせれば古あとゝ。一遍の回向を做くべし。媼は素行沢
監物が姉ゆ。岩根とやのなりしが不義のことありて家を走りしゝ身を
よるゆ所なく。僅なる知音を便りて。こゝに身を習得れ糸竹の業を
なく。生産とまたまこゝに乱れ世の中と云かれ村落のことなれば
其事もくるしかりけれ。羊もたけ色も衰くれば。たゝえて業も
用ひられぬ。やゝ〳〵飢ゆ及ねるこゝろかりて。いふゆゑ没理會さゆ悪しく
心の出来て。こゝものほどに人の物を少しづゝ偸こ其日の糧ゆかくしつゝ
遂ゆ賊のこれゆ入ね。きれも女の身ゆ尋常の盗賊の業を做
がくく。旅人ゆ宿りして。蜜ゆ蒙汁酒をよへ毒ゆ中るものをば此隅田川ゆ
投ば。其路貫を奪ひ。こと眉目よく女子をば騙しく門戸ゆ賣り我
両の金銀を貪りれ。老れゆ及ひて身のほどを顧ふ形

あらんを人の做ざる業ふあらば。姿貌を革さ〳〵想へども此年頃此業に
のみ成れば。他のものを做んあへ一日もさが〳〵。忽ち餓死んも疑なれば。兎や
せはじ角やせはじと想ふ慮よ。筆なりなれ竹澤監物。近年上総の知縣
となりたりと聞バこれふたりて貌とかめるべくもなく。我刃の悪行状を恥
らへば名告往んも面目なく云ようべき術もうなと。躊躇してあるうちふ去
年の春何事のありてか。監物頻ふ美人を捜索るのよりとなれば此折のし
下総國ふ。荘輔とらへるるのの女児。玉琴といひて。才貌双全なるを。縁故ハ知
らねど家を逐出されてふ左遷なる我家ふ宿ア。身のうへのことを説語ふて
なんとよしをなへるあぞ。こハ茅と對面なるべきを良媒なるべしと頼りけ欵
待。竹澤がのべる行ざる旨を説ふ異なる肯ひしれば。我意ぞくのもとを
諭し。財を贈ひて兄茅對面のことを頼をさあるねさるまて彼所ふ
爾してより今日ハ好影響やあれ明日ハ迎の使やあるべしと候うちを
口腹ふ養ふざるを。治計なるをかなふ。ふ倣し偷兒を做こと。今日ぞ存命
ざりしが今不図も己れが制衣しける毒ふ已れと飲。既ふ死やぞりしふ強く
打のあふよりて。其毒ふ吐尽し刃恙なるを得られども。旅客よりと饒し
なるを。是渾己れと作る悪業の報ひなるなんべくても貪生べき
ふ。老早命をとられんと。恐脚色もなく云ようべき。實騰太さを女子れ美
意ふ成る光景を雄〳〵ふう潔よくぞ着へあり。求馬此原委ふ
驚き怒りて。さてハ左あり彩あや。我をを新田の世臣井の求馬と
竹沢を我爲ふ。不戴共天なる。媼ハ方ぞふの人〳〵ぞ。
処をぞ左あるべいぞ我をよかりて。快よ〳〵命終べしと既ふ殺
ぞうを死処ふ前刮絶ハ〳〵梓松此時忽然として甦生此ふ着て

走出くいふ。此媼ハ母人の敵なり。母うを生くかせよと拳を揚て打
〻蒐ば。岩根面を半ばかりうたれ。
心ばくないで親の讐を報へよと。懐より一箇の匕首を出。摔松に
打て。鳩尾の邊をぐさと刺せば阿呼と叫び〻仰倒れ。再び
声もなく。終に桑世なりかねて。求馬此を見て着て。腰刀を抜て山石根が
首を打落し。讐のかたきを討得たりと喜びれ。此時摔松を今年僅
か六才なれば。讐を討めれど。母を甚だしく悲生もせざれ。喜ぶ
そのく。母の屍をもとりもどかり。只顧泣悲しむぞ理なり。求馬夫婦これを
憐み。摔松に對して身のうへを問つゝ。預て石虎法師に
よりて去年の冬母よりの遺。今骨〻宿りしまでの細的の說
話ぐ。夫婦その憂ばなれ身を甚便るとて。
耐忍め。これを俱ひ〻ぐちふ〻氏立出て下総の國へぞ趣きり。且說この
一件ハ甚閙噪うしくなれども。原來人家氏離れる一軒屋のゆゑ
ぞ誰もよく知るのなし。騷ぎのうち召使ふる了鬟逃出て遠ざる
近隣へ告げれふより。漸く天明ごろふ邑人集會して家裡の光
景を看れば。甚異しかりきれバ了鬟ハ緣故を問へる有技有無と
說話るゆゑ保正隣伍の們のくしめて岩根が偷兒いるゝをきり
甚忌悪しその家氏毀ちられとかん。

基氏励列候防「讐言話
竹澤貯美人需」媚話

且說這裡竹澤監物ハ去る正平十四年矢口津ふかて義興公を
欺き討ちまりし功ふより。漸くと昇進し。今ハ下総國の知縣となり

基氏公
関八州を
巡視して
昼と
防き

戒福盛んふして心を想ふこの叶ぶべきことを甚だ出ぬ時めけり。
かく富貴の身となりてハ他人よりこれハ何ぞ願ハ叶ふべきことを
想ふ迄ざれど限なきハ人欲のなふ心しるふ中にて此味沢が性質の貪
欲なるこゝろ義興公に討しとりて知つゞ今斯栄翫の身となるまれ
尚深き望の生ずることを方見まゝ前手畠山道誓反逆の伝ゝ
鎌倉の執事ふこれと定ゝられ入なれを竹澤熟〻窺ひ着く我執事
職となりひゞ東八国をさふるあり。あくまでば天下のこゝろも事ふ
てさられば奈何ゝして執事職よるゝやと想ひしらかど。外藩の
身なれハ基氏公の沙氣色を得ふなく。あるよりもかなと
多方心を煩ふしけれ折ふ新田義統公芳賀入道を討ふして勢ひ強
大なり。下総より蜂食して鎌倉と数ゝ企ふのはしめ頻り

これ基氏公自ら関八州を巡見ふ其防の善悪をみそなはる
うと預〻命觸しまひられ下ゝ八州の知縣國主等武備厳ゝ整へ
道路を修理し橋とりけるゝ。專ら基氏公の見ゝ待ち竹澤
ふの命次聞くこゝなく喜び這回ゝ基氏公ふとりいとぐゝ機會ふと
封内の隈〻まで残る処なく修造と加へ武備盛美を盡しふ上の心を
得んとそ計り。素より奸智ふ富る性なれバ直なる道をりてせず迂遠
ふして事ふ倣ひ左袖右袖女色とり〻謀ふ不如と蜜ふ公腹の老僕
のうちふ心利るものを撰ひ容貌の婬婉ふ女児あ〻ハ價を
論ぜず買ふ求めて。幾許の黄金を懐ふ近國を索捜ふ
愛ふ玉琴へ。嚮ふ父荘輔ふ逐られ下総を出く。武蔵國隅田川の邊りふ
さまよひふり。とある家ふ宿りぬ。誰のもとへ此家の主ハ是竹澤監物の姉ふ

岩根といふ人しが琴落くいまは女偷児となり。此地方にあり。此所にて竹沢美人を孝のはし。國戸の吉あり。しかも好女兒に白引これを送り。それをうけ已まず罪と償ひ。兄弟の對面をせんと想ふ。今王琴が光景を着るに。勝まされる姿色なりとなり。佳人ありと表多方にとし。欺き國戸をして竹沢づくに送りされば。竹澤限りなく喜び。此ぐれた活宝あへ。執る職を買得ること易かりぬべしと嬉しなり。斯深き謀計あれば。些の意やさたるこなく。篤く勤む。恰も我児の如く做けれども。王琴今身のよろづ折り好き疑待に遭ふこと喜ぶの日どのるに明まじと忠思ふ。竹沢熟く甚志と試て今を計べき時なれど。一日酒宴とりて唄ひつ舞つ甚興に乗じ。右を退かしめ王琴に對ひ言ふ。我大姐を買く。喜こと想ひ

なれ過世の因縁あや。相見て初より只子のごく想ふ。色情沢做るこれ心そなく。只顧慈愛かなし。よりて今日より我女児となし。后くを高位の人れ。御臺簾中ともせく想ふ。此事いふ肯べきや否。王琴應答くいふ。奴家は素相公に買はるる身を。かでうり勤まるべきに。譬へ命に代るともいうべき辞べきをまひく冥加なる命を何て乖はべきや。然はあれ賤き奴家と君の御児と做し世の人の誹訪も影响なれ。竹澤ぐいふ我預て此計に設け置り。今這般そそと披露べれば。其こを心得べ。少しも費心なひそ。王琴これを聞く大きに喜ぶ。只夢に愛こ乞ひて。ほしみ恭ちして云。相公かどうにも吹聴されうへ。今より恐こ心なひ。あーあれど。老爺と見なべたふ。慈愛なせりと。挑燈也似拝と做

せば。竹澤おくを笑ふ。酒家言をよくも聽まゝにあそ嬉ろれ。
かゝ親子とうりてハ。何等ことも秘めることなく云ひもせんぞふ。
少ど隔意を持ぞと。盃をとりて遂ふ親子の義をぞむとびろり。斯く
后竹澤家僕ふを欺ひていふ。我若りし昔一個の妾れ孕こるありしを。
いくうこゝ産ふ應くねとありて逐出セーグ。その后此王琴を産りしゝと。我
不身を禀ふれば。告ふふよゝふ育けるども。御中ゝ貧苦ふ迫りて
售ーを。不意も我買得ゝ召仕めれふ此れど親子の證詳ふることゝ
ありふ。今より我女児ふることを披露とうれば。各その心ふ得
ぞーとありふ。こゝ是實ぞと心ひいと同出ふてとふいねと。祝を
述ゝうめり。話休絮煩此時鎌倉の宦領基氏公と先ふ命觸ふ
へるどゝ。新田義統公を隄防もろん爲ふ東刄八ヶ國を分行して上総國

ふ至りまゝ預ゝ竹澤監物威義十ふ數ゝ国境迄
出迎ひ基氏公の警蹕して國中を誘引ゝ其武備の怠らざるふ
照覽ふ入ーゝ鎌倉殿ふもとゝなりて其氣色ふゝ深く賞ーたり。
此地方ふ両三日も休息あゝべーゝ竹沢が城ふ入ーせるゝ仲沢表
ふゝ基氏公と宿ーなるゝ。身の面目なりと喜び心の裡ふゝ我
謀ふわりと雀躍して嬉ーみ。鎌倉殿ハさゝかり供奉の人ゝふ至
ふまで心の限り多方ふ凝待せり。此時ーも春のとゝなりまれど
奥庭の梅咲出ゝ雪うと眷まゝふとりひるふそ竹沢此花を御覽ふ
付まゝ。其よーとゝ才へまいーせーゝ。君ふもこゝ奥ゝなることなゝらと宜よ
あれば。監物喜びふゝ暴ふ其りゝを做山海の珍味を使ゝ酒宴ふ
開ゝうゝ。上下甚奥ゝ既ふ酒闌ふ及へる左側竹沢進ゝ出ゝ

墓氏公竹沢が
庭前の
花菖蒲
賞

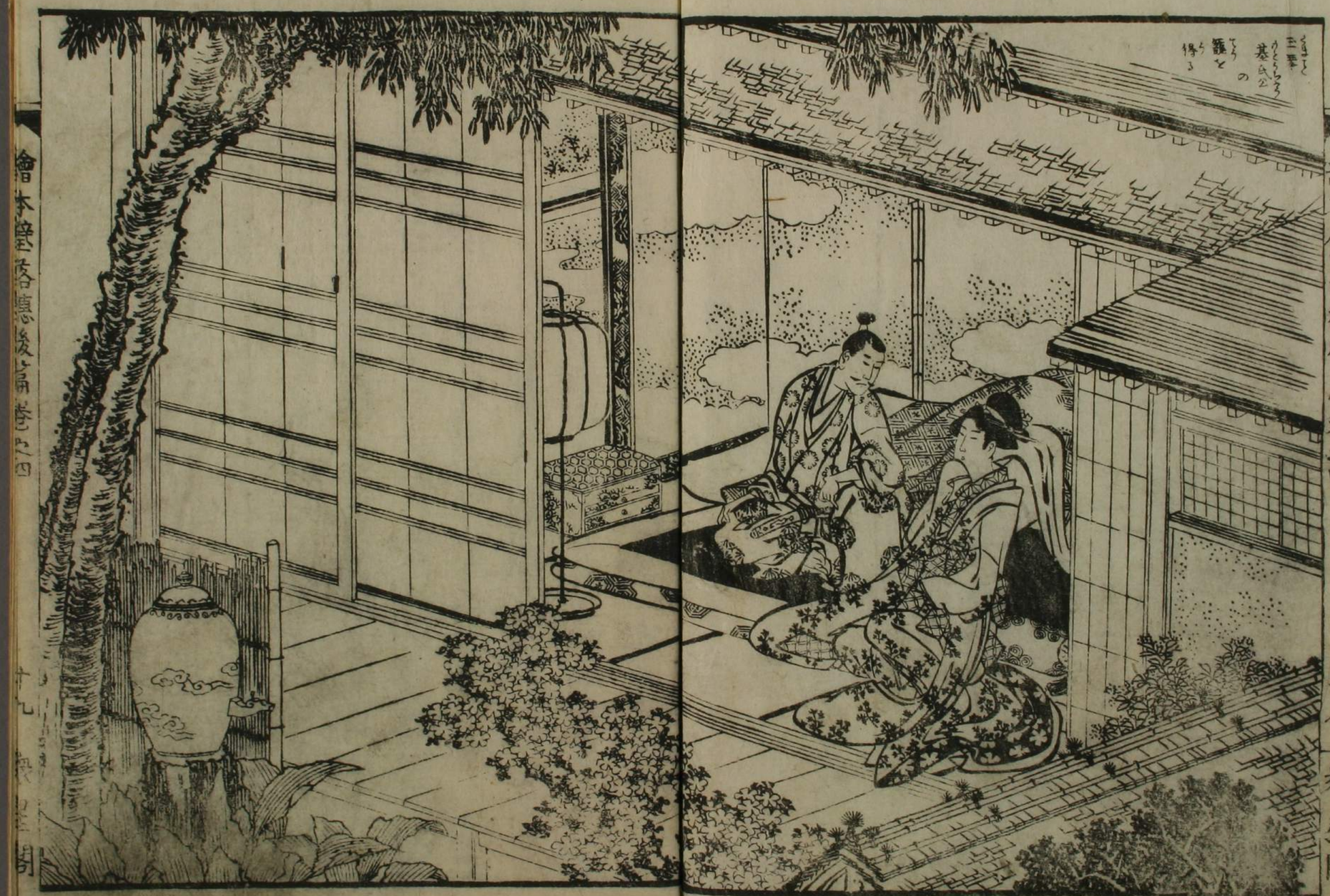
今日の清酒宴へ寡をものみあく。山氣色いうなくんとおびつうあく存ぜし
ふ。望外も奥せーせのひ。いうぞかりうは喜べーうい。これ紅の席ゑ音曲な
らへ。乏敷しくよくてりねよりて甚鹿園兒ふへあれど。幼さ付別し女児
の。此ゑど飯り来てひ。此ごりの管弦の業をにうゑうれの恐多れ
山京の端を浸して。一曲を做さーめ。ほ酒宴れ奥を助けるふーせへいう
ふゆ中ーんというとが君も臣も七八分の酒氣を帯し。付ふれこへ出るべき
よくくとありれば竹澤畏りゑうて玉琴を誘ひ出原来十二分の姿色
あくうへふ。今日を晴と粧ひくれば只是月宮の天女が人間界ゑ天降かと
怪くうまで着ゆるさへふ且妙手の奏箏を弾声おくーう唱ひられあそ。
座中の上下渾渾く。裳抔うの酒をぞ傾けぬ。くくて基氏公へ玉琴ゑ戈
貌ふうく愛ふ。竹澤ふ對ひく想ひごりて汝ごかりの女児と持ち

ふ。彼いうかれ搢紳の娘くとゑ。もいうでふ取ごて今日の佳良
この一曲ふあり。賢うふも仕ほるのうふと玉琴を睨ふーて停てるあそ。何
ふなくーゑ迷惑ゆふ御心のゑど。詞の穂ふ露ゑとられば竹澤くふくこれ
を猜ー。拜伏ーてこへ冥加ゆ。命を蒙るりのうな。前ゆもやーくゑ落ふ
生云ーくれ鹿園兒を。かくまで賞せーせのふこと。親子ゑ僥倖何ごと
これゑ過ぐるごと。尊命ふあまく。怨ゑ入られこと思へれど。彼が不肖月
氏厭のせのうこへ。後宮ゑ召仕られく。武家の禮節歳なくを知ーわ
くこれ小臣ゑ願ひなりとゑ。基氏公満面生春色のひこへ黒坊
きてなり。我鎌倉ふ飯らゑ迎の人を越ぐーと宣へば。竹澤心のうち
かごりゑくーー喜ひ。只叩頭平身ーて恩礼謝ーぬ。斯くー夜もいとう更れ
ぞ。今日の酒宴を終り。基氏公も寢所ふ入ーせのひり。この時竹澤

蜜ふ玉琴ふ云へりしれい世日頃おことゞ爲ふ良婿をうみと想ひ煩ひし
ゞ今日漸〳〵その人を得たり。玉琴詠ずていふ老爺奈何なる人とか婿と
して宜つれぞ。竹沢いふ是別人あらず。今日の基氏公こそ汝が夫なれい。
ふ心ゆかるふや否。玉琴驚ひて云奴家今老爺の子なるとえい〳〵ど。素ハ
賤しき身なれをなど貴人の中擇を執ふ堪へざる。竹沢いふ此言大ふ
あやまてり。昔の宿猫女ハ貌醜くこのとき。鄙〳〵農夫の妻なれども齋の
閔王の后となりて一生を全つせり。まして大姐ハ容貌の艶やかなれさへふ。
不肖なりといへども。上総の國れ知縣竹沢が女児なれふ鎌倉の簾中ゆ
なるとも。何の妨あらべき。玉琴甚嬉しがて云老爺の宣ひ所ことに例し
あらべ素より望める方なれハ簾中ふ入りなんことをなど辞ずなんぞ
あれ奈何して。鎌倉へ送りまふ竹沢が云我児其心やすからば。今暫

基氏公の寐所ふ行〳〵添臥しまふ。君大姐ふ懸想しまふ面ふ露ハ見
れハ似ず喜びまべ。奴君の寵を得ずして酒家をして。執事職ふ勧めまふ。その
職となりまふ大姐を簾中とせんと掌をかゝるとより易し。熟〳〵
とうまへと。尚その術策を濃まふ説けれあぞ。玉琴喜んで生心と得蜜
ふ基氏公の寐所ふ忍び行しまふ。竹沢が謀ふに差ずとよなりまふ。
ひ種ふ。巫山の夢ふ結びまふ。且説此后基氏公只顧玉琴を愛し
まふ。通倉君ふ飯りまふ人も做まふで既ふ半月ばかりとなりまふ。
玉琴ハその十二ふの得意〳〵と想ひまれば一夜の睦言ふ基氏公ふ云へ
まふハ奴家賤しき身をなり。かゝ君の寵を得ること。譬へまふ物ふ
冥加ふ入まれど。父なれ監物ハ外様ふ且官も低しまれば諸臣忌
疑して屢〳〵諫めまふ。蹴んでまふとのありやうを

それのこと哀〜うれとうちかたられあぞ。基氏公これをとらし慰めて這
ものたる慮して。心神を悩ましを。西家近さうちゐ監物を重く司と
なす。おとをば正室とさべられば心ど愁ひまゐる玉琴少しく色と直し
く。命のごとく御恵を受べ。何をう嘆きいぐ重き司と云命あれと。
何とか宜ふべられや。基氏公宣く。今執事職ゐて西家ばてゐふ諸
臣も大ひゐ事を嘲り。明日此ゐを諸臣ら議ゐ。おとべ父ゑこの司ゐ
せんと想ひ。然ども此ゐ容易ふあ〜ばべ。彼おが義ゐ否
おぼつらし。若肯ぜられとも。我力ゐも没理會。甚ことの偽ゐ
をば評議られ後ゐ隠見く窺べし。玉琴喜び〜いゐ。関の東君の外
ふられほど重く人をあじ。父若この司ゐなり得で何人ゐ君と如家ゐ間
を図で。熟〜そらせんとひて。只顧婦言のゆゑ紙謝ふ。翌日
翌日基氏公供奉ゐ従ひ。累世重臣の们を會集ゐ命ひ
そ。我這回諸國を巡見られへ。敵を防ぐべき爲ふあれど。又一面
ゐ知縣の器量ばくらり着く。執事職となれるべき人を撰んゐ爲
なり。然るゐ當國の知縣竹澤ゐ。前年義兵を討。知畧いひ且
今敵を防ぐ備ゐどの嚴ゐ乃ぶ所ゐあ〜べ。
ゐりてこを執事職と做べ〜き。各位心底をたして其得失を
述べと宣べられば。群臣悄然し。言葉なくてあり。延ゐ未座
より声ば発く。無用〜。此事極めて悪〜と云ひのあり。諸人驚ひく
是ばこれふ。これ則足利家累世の臣ゐ逸見美濃入道ゐ。智勇無
二の忠臣ゐり。基氏公少く色を發し。汝何等の見ゐ延ゐあれ。
老早ゐを述べ〜と同ゐ逸見入道謹ん云上意ゐ〜こゆ


王華
基氏公の
簫を
得る

あれど。當家累世の臣ゐ上枚細川仁木等智勇兼備る忠臣多くゐる
をさ置く。よしや太公望ぐ器。孔明の量ありとも。外藩ゐ入れ竹沢と。諸
臣の上ゐ置るゐん。誰人うゐ甚指令を稟さぐ人。然らば是舌を
驤ゐのぐやと。憚るおうゐ諫しぐ。其席ゐ班列る人と渾一般ゐ逸見
ぐ昔と均しきようと述ろうぐ。基氏公も諸臣の肯ひうゐ。奈何
ともすべなくゐる。此日の商議ハやうゐ。此時玉琴こそ紙門のうしろゐ
て密ゐ此光景窺ひ。ものなりしを識其夜基氏公ゐ對ひて云
ハ。今日君の諸臣と議ゐ所ゐ関よ。あのごくゐあれば君寵を人ゐ
受新。班女ぐ哀しみ近ゐ寄ゐ君ゐ捧られば何の楽しゐあり
て世ゐ存命ぐ此上の御慈愛ゐれ暇をゐり。死を早ゐせんと願
ゐれと涙ゐ流せびく倒ゐれば基氏公脊梁を摩淫て宣ゐ。かのど
くやはりゐれ事なせそ。よしや監物執事職ゐゐ得ぐ。おそ氏
ぐ人の嶽ひかばぐ術ゐり此事肯ひぐゐや否王琴云ハ奴家
は君ゐ捧らるんとゐの哀しきの他のゐるれば。いそう宣ゐ。氏
乖ゐ。ぐゐそぐと基氏公宣ゐ。我ゐ一子ゐり。是則我后を襲べきりのく。
此児ぐ母ハ去年辞世ゆれば。ハ人ゐ養ひく子とぐば。たく我元后も家嫡
の母ゐれをゐく。敬ゐ人ゐと疑ひ。と多ゐ人ゐ説ゐくゐ。ぐ王琴預
ゐ竹澤ぐ執事職ゐゐ。ぐを乞れど。今斯我身の産ゐ萬全
れ栄花を受ゐ。ぐ素ゐり薄情の性ゐれば。ゐ竹沢ぐ頼ゐば不崔
只顧君恩の厚ゐを謝ゐ。老早涵倉ゐ將ゐ。帰らせゐと進めゐり
且説竹沢ゐ斯ゐ。ゐ琴ゐ遣ゐく其音信を尋ゐれゐ玉琴
少しも隠ゐとゐ。基氏公諸臣と執ゐ職ゐ所ゐ議ゐ。ひしく逸見

入道が諫め止めしより嫡子の母と做るべきよし宜しくこれまでの有枝
有葉を詳か告げ給へ監物表あハ玉琴ゑ刃の僥倖うれを喜ぶ
さども心裡あハ彼己が爲のことをそうり。我ことを疎ぶれとそ中とうふねと
怨こ且過見入道が諫めさ〳〵えし氏深く恕り。いうあもしくこと豆を害し。我
悔氣得狼を晴さんと想ひうれとそ方見れ。畢竟是甚るゆとう做下回
ふ解分聽。

本庄 本庄

新田義統功臣錄第二輯巻之四終